

高

度成長の「象徴」大阪万博が開かれたのは1970年のこと。その翌年、新宿には日本一の高層ビル京王プラザホテルが開業した。3年後、新宿住友ビルが日本一となるなど、新宿には高度成長の証となる超高層ビルが次々と建設された。新宿駅の乗降者数も増加の一途をたどり、現在では1日平均340万人を超える世界一の規模だ。その新宿駅を基点に伸びる小田急線沿線には、通勤の利便性から無数のベッドタウンが開発されていく。

71年に完成したUR賃貸住宅の奈良北団地もその一つだ。新宿駅から約1時間、最寄りの玉川学園前駅から徒歩15分という立地が人気を呼び、1500戸超の大規模団地には若い住民が入居した。住民は夏祭りやラジオ体操など自治会のイベントを通じてつながりを育み、助け合い、支え合いながら団地の生活を営んできた。その精神は今でも健在だ。URは東日本大震災の被災者に奈良北団地の空

団地全体をケア施設と考える 横浜・奈良北団地(1971年・昭和46年)

変わる日本の「暮らし」と「まち」



新田匡史

につた・まさお

illustration: Shigeyuki Sakata

室を提供したが、自治会も不安な気持ちを抱える被災入居者に顔見知りをつくってもらうとうと、集会所で交流会を数回開いた。

そんな奈良北団地にも高齢化の波は押し寄せる。自治会加入者の4割弱が75歳以上の単身世帯となり、かつての活気は失われつつある。住民からも「顔なじみがほしい」という声が挙がる。求められたのは、いざというときに支え合える、顔なじみがつながる仕組みである。そこでURは、高齢者向け介護事業を手がけるアビリティーズ・ケアネットと協力し「ケア拠点構想」へ向けて動き出した。

◆みまもりと会話が大事

構想の一つは、高齢者向けみまもり住宅である。1日に何度も使うトイレを広げ、段差をなくし手すりをつけるなど、一部の住宅を高齢者に配慮したバリアフリーに改修した。さらに、アビリティーズが提供するみまもりサービスがセットになる。基本は「安心お元

気コールサービス」だ。毎日電話による安否確認を行い、つながらない場合はスタッフが高齢者の自宅へ駆けつける。アビリティーズの土平俊子さんはこう語る。

「安否確認はもちろん、スタッフと高齢者が会話をすることで、寂しい思いをしている高齢者に寄り添うことが大切なのです」
今年6月にみまもり住宅に入居した82歳の女性は、スタッフへの感謝の言葉を何度も口にしていた。「よくやってってくれているわ。来てくれたときはおしゃべりもできるから、本当に嬉しいのよ」

高齢者が会話をしな一方、スタッフは会話をしながら高齢者を観察し、その様子を家族に伝える。高齢者と家族に、誰かが見ているという安心感を与えられる仕組みである。高齢者の相談に乗る「生活相談サービス」を含め、みまもりサービスは月額2100円だ。

入居して間もない女性は、友人がいなくて寂しいとこぼす。

組みです。この取り組みは、周辺地域にも展開したいですね」

この地域は、一帯の高齢化が進んでいる。これらの構想が実現すれば、奈良北団地が周辺地域のケア拠点の核になる可能性は十分にある。

◆体験したノウハウを活かす

これまで、老朽化した団地の建て替えに伴って高齢者介護拠点を新設し、民間事業者やNPOなどの協力を得て高齢者支援を充実させてきた。これが重要な方法であることに変わりはないが、老朽化した団地をすべて建替えるわけにもいかない。今ある団地を生かしながら、高齢者に優しいサービスの拠点をつくる仕組みも求められている。

もちろん、高齢者支援のサービスの担い手は民間企業が主役だが、URも団地や集会所などの「箱」を提供するだけではない。神奈川地域支社で奈良北団地を担当する田中洋子は、高齢者支援に

「でもね、デイサービスセンターを建てているでしょ？ 完成したらお友だちもできると思うわ」

この女性が言うのは、アビリティーズが団地の敷地に建設したデイサービスセンターだ。11月にサービスを開始する予定のこの施設が構想の二本目の柱となる。既にあるURの団地にケア施設が新築されるのは初めて。団地と周辺のデイサービスの拠点となり、高齢者が集うことで顔なじみのコミュニ

デイサービスセンターが新築された奈良北団地



ニティが生まれることを目指す。

「この団地に住めば医療、訪問看護、訪問介護が受けられ、団地内のデイサービスセンターに行けば顔なじみと楽しく会話することができる。団地全体が一つのケア施設で、自分の家はケア施設の一室と考えることができるのです」

そう語る土平さんは、安否確認と生活相談で高齢者の不安を解消してもなお課題が残るといふ。「部屋にこもりがちな人に外出のきっかけをつくることですが、それにデイサービスセンターが役立つと考えています。敷地内に畑をつくり、認知症の予防や体操などのセミナーを開催するので、それを目的にご自分の足で歩いてセンターに来ていただくのです」

さらに、団地の近所にあるスーパーとの協力関係も模索する。「商品の配達は、かえって外出しない原因となります。スーパーまで来て商品を選び、軽い荷物は持って帰っていただく代わりに、重い荷物は家まで配達するという仕

関するノウハウを1年間の派遣で学んだ一人である。

「病院、老人保健施設、訪問看護ステーション、クリニック、グループホーム、包括支援センターなどを数カ月ずつ回るのです」

田中は、病院や老人保健施設で触れ合った認知症の高齢者のことが今でも忘れられないという。「夕方になると家に帰りたいという方がいらつしゃいました。それは自分の家が一番いいということだと思ったのです。できれば、施設ではなく自宅で長く暮らしてほしいと思いますね」

長年住み慣れた自分の家で、自由な生活を楽しみながら充実したケアサービスを受ける。これはURの発想でもある。高齢者が少しでも長く自宅に住むための新たな支援のあり方が、奈良北団地で始まるうと

街に、ルネッサンス



[企画制作] 新潮社